

2021 年度第 17 期小児在宅ケアコーディネーター研修会

修了生の方の学び

- ・親は医療従事者ではないため関わり方は注意しなければいけない。
- ・患者さんの行動に対して医療者はなぜそんな行動を取るのかと愚痴をこぼしたりするが話を聞くと理由がわかってくる。
- ・立場は違いますが小児看護に携わり色々な場面で直面する事例について改めて考えることができた。
- ・事例、グループ討議では同じような場面で悩んでいることや簡単な言葉ですが、看護の主体性、受け入れる、など立ち止まって考える時間を持つことができました。
- ・在宅療養患児との関わり方などで同じような悩みを持っている人が多かった。
- ・家族を巻き込んだケアの実践や、どうしたら母、父ともにケア参加できるか話し合えたことが印象に残っている。
- ・その子らしく生きていくための医療の提供など、今までは医療者の考えを押し付けていたと反省点がみつかった
- ・グループワークを通して訪問看護や地域包括といった違う部署で働く小児に関わる看護師との意見交換をできたことで視野が広がった
- ・在宅支援に完全なる正解はないが、患者、家族に寄り添って色々な方面から支援を考えて行く事が大切だと思いました
- ・子どもと家族が主体になること、これを理解するにはその子どもと家族がどのような経験をしているのかを知る事が大切だと気づきました。
- ・子供の成長発達をキャッチして家族に伝えるだけではなく、親が子供の反応に対してケアしたことや行動したことを見つけそれを伝える。そうすることで親の育児に対する自信につながることを学びました。
- ・研修を受ける前までは、親の子どもへの接し方や育児の方法に問題があると判断してしまったり、看護師として何かしてあげないといけないんだ、この子の社会を広げてあげないといけない、と意味もわからずに焦っていました。看護師が主体で動くのではなく、まずはその親の気持ちを尊重して一緒に考えることが大切だと学ぶことができました。
- ・家族の気持ちを尊重しながら親子での体験を増やしたり、親と子どもと分かり合える感覚を気づけるよう支援が必要と学びました。
- ・母が日常を大切にできるようにその子供と家族の日常を大事にすることは、今だけでなく将来の生活にも影響していくと考えさせられました。
- ・終末期にある子どもと家族の看護では、1日1日の生きる希望を大切にするという言葉が印象に残りました。
- ・亡くなると生きるは正反対なようですが同じよう患者さんは1日1日を大切に生きて旅立っていったんだなあと思ひ返すことができました。
- ・私にできる事は家族の思いを受け止めて、急性期病院の看護師にしかできない事もたくさんあるので感謝しながら看護を引き継いでいきたいと思いました。

- ・患者、家族の訴えに耳を傾け、患者、家族が主体となって、意思決定できるよう、その過程をも支援していくことが大切である。
- ・「患者の視点に立つ」ことを、意識していたつもりですが研修を受講してグループワークを通してまだまだ足りないと感じられました。
- ・答えの出ない課題に出会った時でも、混沌としていても、一緒にそばにいてくれる存在としての看護のあり方を学びました。
- ・子どもと家族が主体である看護について考えることができた。
- ・今までは退院がゴールと自分の中でひとつの目安になっていたが社会資源の現状やグループワークを通して地域で暮らす子ども、家族について学びを深めることができた。
- ・治療や新たなデバイスが必要になると看護師として話を傾聴していたが生活するなかでさまざまな選択をし、悩み、過ごしているとわかった。
- ・終末期の看護では子どもや家族の思いを尊重できるように関わりをもちなぜそのように考えるのかまで気持ちを考え関係を構築することが大切であると思った。"
- ・それぞれの子どもや家族が体験していること・感じている事を 100%理解することは、医療従事者は無理であっても理解しようと寄り添う姿勢が必要であること
- ・看護師としての視点をもちながら子ども・親・家族の思いや感じ方も共に理解しようとするのも大切である事を学んだ。
- ・看護として忘れてはいけないことは、子ども・親・家族を一人の人として尊重し、一緒に見て一緒に取り組み、その人の感覚や捉え方・思いを大切に分かち合い、そばにいてどうありたいかに応じてケアや社会資源、その他との連携の調整を取っていくである。
- ・患児が何を求めているのかを常に考えながら家族の状態を把握し、一歩先の将来を見据えて対策を提供し、少しの変化を見逃さず家族に伝え喜びを共有し、家族の話を傾聴し思いを共有していく事が大切である。
- ・その子が人間らしくその子らしく生きて行けることが大切となるため、枠にとらわれずに提供する事、共感して寄り添う事は大切ではあるが、感じすぎると苦しくなる事もあるため、第三者の意見を持ちつつ共有していく事が大切であることを学んだ。
- ・終末期の子どもと家族の体験と看護では、看護師が何かしたいではなく、その子が何をしたいかを考える事が大切であり、その人がどう生活した・どう生きたいかを考え、医療の選択することを分かち合う事も大切であることを学んだ。
- ・医療的ケア児や家族と接する時は、一人の看護師だけでなく、一人の人として学ぶことも大切であること、受容する事は大切であるが、受け入れると受け止めるでは違いがあることも学んだ。
- ・事例検討を通して、実際に発表もさせてもらい、他の施設・病院での意見を聞いた事は貴重な体験もさせてもらったが、他の施設・病院の発表を通して勉強になる面もあった。
- ・今回、研修に参加でき、日々の看護を振り返り、在宅移行する患者と家族への関わり方や、その中で看護を考える重要性を学ぶことができました。